

1. パラオ共和国とは

・地理

パラオは日本から南に約3,000kmの海原に点在する大小300余りの島々からできており、これら多数の島のうち人が住んでいるのは9島あり、残りの大多数は無人口島です。また、人口2万人弱の半数近くが首都コロールのあるコロール島に住んでいます。

・歴史

第一次世界大戦の終戦後、約31年間、日本の統治時代があったため、比較的日本に近い文化が残っています。例えば人の名前です。約40人いるポリスアカデミーの中には、「サカジロウ」、「キョウタ」、「キンサン」、「サブロウ」、「タカタロウ」といったファミリーネームの生徒達がいきました。ちなみに「タカタロウ」は女の子で、父親は「ヒデキ・タカタロウ」です。初対面でも名前を聞くだけで親しみを感じることができました。

2. 活動内容

・派遣理由

パラオの警察官や公安局員（刑務官や海上保安官）は暴力などの危害を受けるリスクを常に持っていますが、危害から身を守る術、護身術を習得していません。そこで、国の護身術として柔道が採用されたのですが、パラオ国内には柔道のできる人が一人もいないため日本から指導者として派遣されました。

・パラオ柔道のはじまり

柔道衣も畳も何もないゼロからのスタートでした。はじめに、柔道にはパンチやキックがないという説明からです。ジャッキーチェンなど映画の影響が強く、殴る、蹴るが主流だと思われていた護身術で、抑込技や関節技で相手を制するという概念は新鮮だったようです。彼らの理解を得るために、柔道とは少し離れますが、ボクシングと柔術が戦っている異種格闘技のビデオを見せたりもしました。

3. ポリスアカデミー

・Tシャツ短パン柔道（写真右）

派遣されて1ヶ月、自分にとって1期生となるポリスアカデミーが始まり、月曜から金曜まで毎日2時間の柔道クラスがありました。柔道衣がないため、アカデミーの制服であるTシャツで柔道をしていました。そのため、双手背負や小内刈などの襟や袖を持った技は殆んどできませんでした。また、護身術や逮捕術といった概念が強かったため、上半身が裸の相手を想定した練習も行い、レスリングと柔道が混ざったような柔道指導でした。



- ・日本から柔道衣の寄贈

派遣されて1ヶ月が経った頃、NHKラジオに出演して「Tシャツで柔道をしている」というパラオの柔道事情について話をする機会を頂きました。その結果、平日の朝8時からの放送にもかかわらず多くの応援メッセージを頂きました。その中で、新品の柔道衣を20着も購入してパラオに寄贈してくれた方もおられ、計38着の柔道衣がパラオに届きました。寄贈された柔道衣は現地の新聞でも大きく取り上げられ、早速、ポリスアカデミーの授業で使用することになりました。

- ・初の柔道トーナメント

卒業を間近に控えたアカデミー最後のクラスで、パラオ初となる柔道トーナメントを開催しました。“有効”や“技あり”などのポイントはありません。相手を投げて抑え込むか、絞技や関節技で相手から“参った”を取れば勝ち、という特別ルールで行いました。国際ルールとは大きくかけ離れていますが、柔道の試合を一度も見たことがない生徒にとっては、勝敗がはっきりしていたので分かりやすく、非常に盛り上がりました。また、それとは別に、決勝戦を見守っていた生徒全員が尊敬の意を表して正座をしていたことが非常に嬉しく思いました。

- ・司法大臣から感謝状

パラオに派遣されてから約1年が経った頃、日本で所属していた柔道部の方々がパラオを訪問しました。寄贈して頂いた柔道衣20着を持参してポリスアカデミーに参加し、得意技の紹介や技術指導などが行われました。日本とパラオ、柔道による友好の架け橋となり、警察や税関などを管轄する司法大臣から感謝状が手渡されました。(下写真)



4. パラオ柔道連盟の設立

- ・設立の目的

警察やポリスアカデミーで柔道が採用され、パラオで柔道が始まってからまだ2年弱ですが、これからパラオの柔道がもっと安定継続して発展していくためには個人の力ではなく、組織の力が必要であると感じました。個人では受けられないサポートも法人団体としてパラオ柔道連盟が認められれば、パラオオリンピック委員会に加盟でき、様々なサポートを受けられるようになり、また、国際大会にも参加できるようになります。

・発足

パラオ柔道連盟が非営利法人団体として登録されるためには4名の役員（会長、副会長、秘書、会計）と連盟規約などの書類が必要でした。会長はポリスアカデミーの総指揮官、会計と秘書は同僚の警察官に就任していただき、裁判所に登録申請を行いました。そして、2005年2月28日、大統領の承認が下り正式にパラオ柔道連盟が非営利法人団体として発足しました。その後、オセアニア柔道連盟に加盟を申請し仮承認を受け、2005年9月、カイロの世界選手権における大陸別総会で正式に加盟が承認されました。これで、パラオは正式に国際柔道連盟の一員となりました。

・柔道の普及

派遣された当初、一般向けの柔道教室は警察からストップされていました。警察が護身術や逮捕術として柔道を採用したのに、一般の人が先に上達すると困る、といった理由からです。しかし、活動も1年以上が経過し、相手に危害を加えるのではなく相手を尊敬し礼を重んじる柔道が認められたのか、そういった意見もなくなり、大学生を中心とした一般向けの柔道教室を開催できるようになりました。初めて警察で開催した自由参加の柔道クラスは受身3日目で10人いた参加者がゼロになった経験を活かし、次のクラスからは初日に膝を着いた状態での乱取りを行い、自ら相手をすることで柔道とは何かを知ってもらうようにしました。抑え込むとなぜ逃げられないのだろう、と興味をもった参加者はその後も継続し、3名から多い時で10名ぐらいですが、少しずつ参加者が増えるようになりました。

・オーストラリア遠征

パラオで柔道を指導する自分の任期は2年です。後任を要請していたのですが見つからず、任期もあと2ヶ月となりました。自分が日本に帰国すれば誰がパラオの柔道を引っぱっていくのだろうか。パラオ柔道が自立するためにはオセアニア柔道連盟と密に繋がるのが重要です。これまでは自分がオセアニア柔道連盟とパラオを結ぶ役割をしてきましたが、これからはパラオ人が主役にならなければいけません。かねてより目をつけ、パラオ柔道連盟の秘書を務める警察官の同僚に経験を積ませるため、オーストラリア遠征に行きました。オセアニア柔道連盟の役員を務める Patrick Mahon 氏の自宅に滞在し、3つの道場に通い、練習以外の時間は部屋にある柔道のビデオを何本も見続けました。パラオには自分しか黒帯がいませんが、遠征ではたくさんの黒帯と練習をすることができ、彼は次のアカデミー柔道指導者として大きく成長しました。

5. オセアニア選手権

国際柔道連盟に正式加盟し、初の国際大会であるオセアニア選手権が2005年11月、オーストラリアで開催されます。試合も大事ですが試合後に開催されるトレーニングキャンプに参加してレベルの高い柔道を肌で感じることや、実績（前例）を作ることもパラオにとって必要だと思っています。しかし、参加するにあたり多くの問題があります。オセアニアにある国の多くは島国なのでバスで試合に参加することはできません。飛行機を乗り継いだ移動には莫大な遠征費がかかってきます。そういった障害を乗り越えて、是非、参加したいと思っています。オセアニア

選手権まであと1ヶ月、パラオ柔道連盟の日本支部という気持ちでこれからもサポートしていきたいと思います。

6. 謝辞

柔道のなかった真っ白な国、パラオで歴史の1ページを開くことができたのも、多くの方々の温かいサポートがあったからです。パラオ柔道連盟の設立に向け支援を下された“オセアニア柔道連盟の Clare Hargrave 会長”や、2年間会社を離れることを許可し温かく見守って下さった“株式会社 神鋼環境ソリューションの皆様方”、柔道衣を送付して頂き温かい心遣いを下さった“かたの健康会館の珠数泰夫先生”、“関西医療学園専門学校の廣岡聡先生”、“兵庫県立御影工業高校の奥田直文校長先生”、派遣前研修からお世話になりました“講道館の諸先生方”、そして活動を支えて下さった全ての方々、感謝の気持ちで一杯です。ありがとうございました。

以 上

高野重好（たかのしげよし）

青年海外協力隊員としてパラオへ（2003年7月～2005年7月）

福井大学院卒、講道館柔道三段

神鋼パンテック（株）勤務

昭和47年12月25日生